

氏名(本籍)	野 ^の 口 ^{ぐち} 美 ^み 幸 ^{ゆき} (宮崎県)		
学位の種類	博士(心身障害学)		
学位記番号	博甲第4366号		
学位授与年月日	平成19年3月23日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	不注意や多動を示す児童の攻撃的行動に対する介入とその効果の検討		
主査	筑波大学教授	博士(心身障害学)	前川久男
副査	筑波大学助教授	博士(教育学)	野呂文行
副査	筑波大学助教授		加藤元繁
副査	筑波大学教授	医学博士	小玉正博

論文の内容の要旨

(研究の目的)

ADHD児の対人行動はADHD児の社会的適応に影響し、ADHD児の予後予測することが指摘されてきた。そこで本研究は、不注意や多動を示す児童の社会的スキルと攻撃的行動に焦点を当て、その実態と介入方法を明らかにすることを目的とした。

(研究の方法)

研究1から研究3では、児童用社会的スキル尺度の作成と不注意や多動を示す児童の社会的スキルの実態を調査した。研究4では、1名の幼児を対象に社会的スキル訓練を行った。

研究5と研究6で、不注意や多動を示す児童の攻撃的行動の実態を調査した。研究7ではADHDと診断された小学生1名に対して機能的アセスメントに基づく介入を実施した。

研究8から研究10でreactive-proactive aggression尺度の作成と、不注意や多動を示す児童のreactive aggressionの実態について調査を行った。研究11で、不注意や多動を示す小学生1名に対して機能的アセスメントに基づく介入を実施した。

(結果と考察)

不注意や多動を示す児童に見られる社会的スキルの実態について検討した。その結果、不注意多動群は定型発達群にくらべて、適切な社会的スキルが見られず、引っ込み思案行動や攻撃的行動が多いことが明らかとなった(研究3)。次に、不注意や多動を示し、攻撃的行動などといった対人行動の問題が見られる幼児1名を対象として社会的スキル訓練(以下、SST)を実施した。その結果、SSTは適切な行動の獲得や周囲の子どもからの受容に介入効果が見られた一方で、攻撃的行動などの問題行動には変化が見られなかった。したがって、攻撃的行動に直接介入アプローチする必要があることが考えられた(研究4)。

そこで、不注意や多動を示す児童に見られる攻撃的行動の実態について不注意多動群と定型発達群の比較を行った。その結果、不注意や多動を示す児童は定型発達群の児童よりも攻撃的行動多く見られることが示

された(研究5)。そこで、ADHDと診断され、攻撃的行動が見られた小学校3年生男児に対して、機能的アセスメントに基づいた介入を行い、その効果について検討したところ、介入後に対象児の攻撃的行動が低減していた(研究7)。したがって、不注意や多動を示す児童の攻撃的行動の低減に機能的アセスメントに基づく介入が有効であることが考えられた。

いくつかの研究が、ADHD児の子どもは攻撃的行動の中でも reactive aggression がよく見られることを報告している。そこで、研究9では不注意や多動を示す児童に見られる reactive aggression と proactive aggression の実態について、不注意多動群と定型発達群の比較を行った。その結果、不注意や多動を示す児童は定型発達群の児童よりも reactive aggression と proactive aggression が多く見られることが示された。さらに、不注意と多動の両方を示す児童は不注意のみの児童に比べ、reactive aggression が高いことが明らかとなった(研究9)。さらに、不注意や多動を示す児童と、定型発達群の児童の reactive aggression と孤独感との関連を検討した。その結果、不注意・多動と reactive aggression を示す児童は孤独感得点が有意に高いことが明らかとなった(研究10)。以上の結果から、不注意や多動を示す児童には reactive aggression が多く見られ、これらを両方とも示している児童は心理的不適応感を抱えている可能性が示された。そこで、不注意や多動を示す児童に対して、機能的アセスメントに基づいた介入を行ない、攻撃的行動を低減すると共に、reactive aggression や proactive aggression の低減にも効果があるのかどうかを検討した。その結果、介入によって対象児の攻撃的行動、reactive aggression, proactive aggression の全てが低減したことが明らかとなった(研究11)。

以上の結果から、不注意や多動を示す児童の社会的スキル欠如の改善については社会的スキル訓練が、問題行動である攻撃的行動や reactive aggression の低減については機能的アセスメントに基づく介入が有効であることが示唆された。本研究は、不注意や多動を示す児童の対人行動について基礎的資料を提供した点、これまで ADHD および不注意や多動を示す児童では研究数の少なかった攻撃的行動に対する介入方法について検討を行い、機能的アセスメントが有効であることを示した点で意義があったと考えられる。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は、不注意や多動を示す児童の対人行動を、社会的スキルと攻撃的行動という観点から明らかにするとともに、児童の示す攻撃的行動に対する有効な心理学的介入方法を明らかにすることを目的とした研究である。本研究の結果、不注意や多動を示す児童が攻撃的行動を示している実態が明らかになるとともに、特に外的報酬を得る等の目的のための proactive aggression よりも、嫌悪感の源となる対象に危害を加えて自分を守る reactive aggression を示す児童が多い可能性を示された。また不注意と多動を示す児童の心理的不適応感を調査した結果、reactive aggression を示す傾向が強いことが明らかになった。調査対象となった児童の医学的診断等が明確になっていないなどの課題はあるものの、不注意や多動を示す児童が学校不適応や社会的不適応となる背景要因を明らかにしている点で評価できる。また、介入研究を通じて、不注意や多動を示す児童の攻撃的行動の低減のために、社会的スキル訓練だけで十分ではないこと、実際に攻撃的行動が生じている通常学級内において機能的アセスメントとそれに基づく介入を行う必要があることを示した。介入研究はそれぞれ対象児童が1名であり、その結果を一般化することについては慎重になる必要はあるものの、わが国においては、通常学級内で示される児童の攻撃的行動に対する介入研究は数少なく、その点でも高く評価できる。

よって、著者は博士(心身障害学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。